

令和4年5月1日発行 春燈/第77巻第5号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

# 春燈

2022 May

5  
月号



## 成瀬櫻桃子の句

マーチョヤンチョ  
馬車洋車のゝしりかはし五月來る

「國民演劇」昭和十七年

昭和十七年四月、万太郎は内閣情報局の斡旋で約一ヶ月、満州に赴いていた。「新京にて」の前書があり「馬車洋車」に中国語読みのルビがふつてある。「洋車」は人力車のことで、馬車と人力車の車夫同上が声高な中国語で交わす罵声が生々しい。土埃が立つ新京の街の、時代の狼糞、喧噪までが見えるようだ。そしてその中に確かにやって来るみずみずしい生命力に溢れた五月。

藤原若葉

## 成瀬櫻桃子の句

牡丹哀しもとより草の深ければ

『冬三日月』昭和二十七年

前書に「北鎌倉・東慶寺にて」とある。寺の奥の庭に草が深く育ち、その中に牡丹が咲いているのを、見つけ出されたのであろうか。通常なら大事に育てられているであろうはずの、華やかな牡丹が、草深い中にひそと咲いている。美しいと思いつつもその事を哀しと詠まれたのである。私自身も昔、幾度も訪れた事のある東慶寺でのこの句は、尼寺だけに心に残る句である。

溝越教子

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

如月の風をゆたかに隅田川

触れてみる指に親しや春の水

朝空を家郷のごとく飛ぶ燕

高だかと仰ぐ白たへ花こぶし

春潮やとほき異国に戦の火



春の雪われに歌へと降りくるよ

鐘の音の行つたきりなり下萌ゆる

早春の瀬音押しゆく瀬音かな

初蝶を追ふや小川の通せんぼ

どう見ても偽作の系図鳥ぐもり

## 燈下集



○ 府川昭子

梟の話に夜の更けにけり

紅梅にとろりと甘き夕日影

水仙に日暮の障子ほの蒼し

水仙に通ひ馴れたる小道あり

濡れてゐる寺の鐘の音春の宵

○ 篠原幸子

新しき靴のなじみて寒明くる

会話することの大事さ木の芽張る

竹林のはつかなひかり節分草

できることせばまりゆくも水ぬるむ

風信子愛し雅号とせし人よ

○ 矢口笑子

薄墨の筆ペン買つて冴返る

荒東風やぶつきらぼうな子の返事

うす紅の塩をひと振り雛料理

囀や昔も今もながら族

啓蟄のひよいと見つかる探し物

○ 松山三千江

余寒きびし音の絶えたる岩の庭 (瑞泉寺四句)

春寒し鐘楼縄でくくらるる

水仙の葉の括られて春を待つ

三椏や蕾も花も俯きて

姉に聞く父のあれこれ花辛夷

○ 藤原若葉

ブレードの削るリンクや春立てり  
片寄せの春雪の道髪切りに  
園丁の跼む日溜りクロッカス  
陽光に擦られぬるうすごほり  
志野小皿うぐひす餅のおちつきぬ

○ 大文字孝一

冴返る楷書で記す誓約書  
微笑仏祀る山寺梅ふふむ  
石仏の大きな耳や百千鳥  
故事多き飛鳥の里や草萌ゆる  
窯焚きの菜飯一碗搔つ込めり

○ 和田絢子

マスクして臉重くなりにつけり  
参道に人待つごとく返り花  
日記とてメモほどのもの春の蝶  
春一番時計がはりのローカル線  
春夜無音鉦が息づく大手門（赤穂城）

○ 神田恵琳

産土の雑木ふくらむ雨水かな  
浅剝く母の手さばきつづがなく  
佐倉城址残る石垣春さむし  
独活一本残る無人の販売所  
ワクチン接種済ます親子や春炬燵

○ 小山繁子

日曜の朝の名曲レタス噛む  
亀鳴くや漆黒の闇もてあまし  
黒板にのこる数式鳥帰る  
薄氷や蹲踞に月閉ぢこめて  
ため息をつくがに動き夜の蜩

○ 小島昭夫

うららかやいくつときけば指四本  
受験期の日比谷図書館君の席  
カチューシャの歌声喫茶多喜二の忌  
理系女史の解説やさし梅ふふむ  
歳時記に主宰の例句桜餅

○ 渡辺若菜

薄氷や思ひとどかぬチョコレート  
一日の手順違はず日脚伸ぶ  
父の声殊に大きく「福は内」  
笹に降る雨の清しき針供養  
本殿の広き階百千鳥

○ 浅木ノエ

子うさぎほどシャボン泡たて春隣  
万華鏡ごつとり春の立ちにつけり  
梅東風や目の黒々と御礼絵馬  
大時計の捻子まく音の余寒かな  
畑先で開く手紙や蝶生るる

○ 西岡啓子

立春の鳥の羽ばたく水面かな  
幼子の睡毛のながしクロッカス  
手廂をもるる日差も春めけり  
足音も声もあかるき春シヨール  
恋猫や星はしきりにまたたきて

○ 懸林喜代次

春を待つ麒麟は首を長くして  
段ボールで土手すべる子や草青む  
あたたかやエンドロールに旧知の名  
うぐひす餅に尻餅ついたのは誰だ  
卒業の歌半ばより涙目に

○ 中村紀美子

土を割る小さな息吹クロッカス  
若き日の思ひ出いくつ神シヨール  
年老ゆる我にも便り水温む  
浅剝殻小みちに敷ける安房の村  
はりつむる心もゆるみ犬ふぐり

○ 豊谷ゆき江

駆上がる土手の川風梅二月  
幼子の頭でつかち草萌ゆる  
紅白の梅の盛りや冠木門  
立子忌の鎌倉山や百千鳥  
春さむや土産に買ひし鳩サブレ

○ 後藤眞由美

余寒なほ小さき影揺る心字池  
野火止や早緑の透く春の雪  
うすらひや映りては消え鳥の影  
黒猫の背ざらつくや靈ぐもり  
竜天にうねる長江幾星霜

○ 川崎真樹子

蕾つぼみふるれば春のやはらかさ  
亀鳴かむとひそかに甲羅ふくらまず  
凍返る有精卵の黄身の張り  
若布汁海に恋する塩加減  
戒名のごとき病名うらけし

○ 木村梨花

春炬燵ひとりじめしてミステリー  
老婦人の遊ばせ言葉春うらら  
地にありて空の瑠璃色いぬぶぐり  
合掌の形愛しき名草の芽  
朝寝して五色の夢に溺れけり

○ 溝越教子

ハミングの少女ら過ぐる迎春花  
羽田への飛行機光るいぬぶぐり  
映画村子役声張る蜆壳  
疫病の居座る列島春の雷  
春しぐれ電子手帳の文字うすれ

○ 上野進

霜解けて庭のいのちの目覚め初む  
俳諧は心の呟き山眠る  
県境と言ふ土手一列に土竜塚  
氏神に詣で賜る花粉症  
晩霜に囁く朝日鶏の声

○ 石橋邦子

古書店につづくカフェの灯あたたかし  
姿よきわかさを買ふ夕べかな  
露のたう外葉にいたみありにけり  
インカのめざめてふ芋植糸にけり  
鳥帰るはるかひかりめざしけり

○ 河本由紀子

二千二十二年二月二日の一会かな  
猫柳しなやかに生き逞しく  
夫の忌を修しひとりの春愁ふ  
雛の夜に逝きし人恋ひ雛かざる  
ばあばかはいいと孫に言はるる団子花

石田康明

春耕の丹沢山系揺るぎなく  
鉄板焼のおかかは弾み山笑ふ  
早春の潮のにはひも明石焼  
病院を出でてまた入る古里の春  
早晩で済まぬぞ春怨第七波

○ 永井恵子

真向ひは老人ホーム梅真白  
二つ三つ夫の手にある露の臺  
猫柳淵に見つけて母は亡し  
滝音を遠くに聞く日鳥曇  
受験子と囲碁打つ祖父や縁の先

宮崎洋

荒井ハルエ

地球儀に戦禍の国や冴返る  
薄氷のとけゆく朝の静けさに  
紺碧の海へ傾るるミモザかな  
分校に通ふ子ひとり山笑ふ  
浜風に干さるる若布富士遥か

持田信子

畦焼く火消しても残る過疎の村  
木々芽ぶくつくばひに猫伸びあがる  
さざなみや日の斑にあそぶ春の鴨  
梅が香や先師の句碑の文字やさし  
薔薇の芽や少女の像の赤い靴

# 余言

鈴木直充

バス停に大雪のバス泳いで来

園部 落郷

落郷さんは、雪国の秋田県に住んでいる。バスは地域の人たちの貴重な足だが、冬は一日に一メートルも積もる大雪に見舞われて運行が妨げられることもある。バスは揺いても揺いても降り積もる雪に車輪がもつれ、よろめきながら走って来る。屋根に雪を被りながら、やっとバス停に到着したバスのようすを「泳いで来」とユーモラスにエールを込めて表現している。

この句から、シヨールを巻いた女性や耳袋を掛けた少年が、白い息を吐きながらバスを待つシーンが浮かんでくる。雪国に生きる落郷さんならではの作である。

芽吹かむと樺真直に光満つ

中野あぐり

木々にはそれぞれ固有の姿と表情がある。関東平野の土質に合った樺は、空を掴まえばかりに高々と伸びる。樺は

出している。この句は、一見写生句のようだが、中七の「摩れ合ふ音も」が下五の「雨水」へ緩やかに畳み込み、抒情を生みだしている。

なれそめを子に問はれたり露の臺

片山 博介

子どもは、自分はどんなきつかけで生まれて来たのだろうかと素朴な疑問を抱く時期がある。それまで、両親は自分をまるごと愛育してくれる存在であり、じつは二人が他人であったことなど考えもしなかったであろう。ところが、父母が出会って結婚し、自分がこの世に生を受けたと知るときが来る。こうした微妙な機微は、男の子よりも女の子のほうが早く感じ取るようだ。

博介さんのお子さんは、両親のなれそめがとても気になっていたようだ。そこで、露の臺が萌え出る頃、思い切った父に訊ねたのだ。博介さんは戸惑ったであろうが、子の成長に目を見張ったにちがいない。

窯焚きの菜飯一碗搔つ込みり

大文字孝一

「窯焚き」は、陶器を焼いている人を指している。成形した陶器を窯詰めし、火入れする。窯には最初木片を入れ、徐々に太い薪を押し込んで温度を上げてゆく。窯の中の陶器の色は、温度が上昇するにつれて黒っぽさ、赤っぽさを経て白く輝くようになる。窯焚きは数日ばかりで行われ、陶工は食事もそこに窯に張り付くのである。そこで、菜飯を一碗搔つ込んだのである。青菜を飯に炊き込んだ簡

「けやけき木」すなわち著しく目立つ木という意である。

冬に潔く葉を落とした樺は、春を迎えると萌黄色の新芽を吹き出す。他の木々を凌駕して立つ樺はまっさきに春の陽光を浴びて芽吹くのだ。樺はあぐりさんの背筋を伸ばし、命を輝かせてくれたであろう。

春障子どこへも行けぬ影法師

木多芙美子

「コロナ禍」という言葉は歴史に深く刻まれることになる。新型コロナの災厄で、誰もがもう三年あまり家籠りを強いられている。

籠もると言えば、日本には中世以来の隠者文学がある。世の中に距離を置いた隠遁者が、求道生活をしながら自己を凝視し、優れた文学を生み出した。西行はもとより芭蕉の文学の源流にも隠者精神が宿る。

この句は、影法師すなわち己の影と共に部屋に籠っている情景を詠んだもの。芙美子さんは「どこへも行けぬ」と慨嘆しているが、春障子に揺曳する影法師とあそびながら、隠者さながらの風雅を詠出しているのである。

熊笹の摩れ合ふ音も雨水かな

豊谷 青峰

「雨水」は二十四節季の一つで、立春から十五日後にあたる。雪が雨に変わり、氷が融けて水になるという意である。熊笹は被っていた雪を振り払い、雨水を迎えた。その葉擦れの音は春の喜びに溢れている。熊笹の根元に残る雪の白と笹のみどりの葉の対照が鮮明で、早春の風趣を醸し

便な飯は、火を操る陶工の荒ぶる心を宥めてくれたであろう。そして、陶器にも菜の香が染み込んでいくようだ。

陶器店を営む孝一さんは、名だたる窯場を尋ねて佳き品を仕入れる。この句は窯場を訪問したときの囁目で、孝一さんに陶工の一途な精神が乗り移っている。

卒業の歌半ばより涙目に

懸林喜代次

卒業生の大方は「今日はけつして泣くまい」と決意して式に臨む。跳ね返りの若者流に言えば「こっぱずかしいこととはしたくない」のだ。けれども、肅然と式が進んでゆき、校長先生から卒業証書が授与されたあと、「蛍の光」や学校と地域にまつわる歌の合唱に入ると、もう涙、涙…となる。

三月、喜代次さんは孫の卒業式に臨席し、涙する孫に往時の自分を重ね合わせているのだろう。

春の雪金閣見むと急ぎけり

木村みどり

金閣寺は、春夏秋冬さまざまな表情を見せ、人を惹きつけてやまない。紅葉に泥んだ金閣寺は代表的な風景の一つで、さながら浄土を思わせる。みどりさんは、この寺に深い愛着があつて、たびたび訪れているのだろう。

みどりさんの在所の千葉県に春の雪が降った日、金閣寺にも降っているにちがいないと思ひ、京都へ向かったのだ。旅中、みどりさんの心の中の金閣寺には、もう春の雪が降っている。

# 当月集

鈴木直充選



○ 佐藤まさ子

森林の朝日を受けて百千鳥  
山奥の宿坊香る梅の花  
春の鴨番の動き揃ひけり  
草青む土の匂のやはらかに  
ゆつくりと歩む夫婦や梅日和

○ 重実ひとみ

一病に目眩も加へ春落葉

春泥を顔まで跳ねて部活の子

鳥帰る羽音に力漲らせ

暖かや素手にて抜ける畑の草

朝市へ出ず桃のつぼみを選びけり

○ 秋山 薫

裏山の嵐に太る大氷柱

日輪の華厳の雫大氷柱

雪女青き夜空の軋む音

遠山の墨絵のやうに雪解霜

寝付かれぬ闇夜の奥の遠雪崩

○ 坂本依詠子

料峭や遊具周りを児ら駆ける

街灯を打つ雨粒や春未明

早朝のキャンパス広し囁れり

若き等に茶事の心得利休の忌

名を言へば恩人数多春の星

○ 種田 利子

読終へし書を本棚へ寒の明

立春やペン先軽く友へ文

上向きてすてんと転ぶ春の雪

春寒し痛さ堪ふる膝小僧

老友の恩情深し福寿草

# 春燈の句

鈴木直充選



今日の用明日にのぼすや春炬燵

春一番船首たゆたふ坂越浦

鍵盤の冷たさ指へ「ペチカ」弾く

薄氷の柄杓とち込む甕の中

早春の畑深々と獣跡

少年はボクからオレへ柳の芽

嫁きし子の部屋そのままに梅香る

霾ぐもり運転免許更新す

鯽起し荒浪高き日本海

亡き夫に捧ぐる句あり冬の月

初詣ドレスを着たる犬に会ふ

東京のビルに張りつく春の雪

探梅の一夜を見上ぐ静と動

立春の師の句おとなふ朝の窓

兵庫 清水 まり

はまぐりの一つ開かぬ雛の夜  
立ちこぎの白き靴下草青む

東京 那須 禮子

庭隅によへの雪あり戸を練れば  
病み伏せばひなの日飾る色紙のみ

東京 若松 恭子

こぼしつ高杯にもるひなあられ  
看護師にたよるシャワーや春日ざし

神奈川 犬嶋テル子

バレンタインデー今日は新聞休刊日  
親子の情「新口村」に雪しきり

東京 遠藤 レイ

悲劇「井伊大老」舞台雛飾る  
武相莊騒然の世に椿咲く

栃木 森 ふく

笛鳴や木立の径のふかまりに  
鬼やらふ米寿の豆をつまみけり

千葉 広瀬 克子

小流れの清の水音猫柳  
朝々の囀確か大公孫樹